

平成 30 年 6 月 9 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H06920

研究課題名(和文) 両大戦間期の「進歩的な」シューベルト論：アドルノ、シェーンベルク、シェルヘン

研究課題名(英文) The "progressive" Schubert-Interpretation: Adorno, Schoenberg, Scherchen

研究代表者

山口 真季子 (YAMAGUCHI, Makiko)

大阪大学・文学研究科・招へい研究員

研究者番号：40782214

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、作曲家フランツ・シューベルトに対する評価の転換点を照らし出すべく、作曲家シェーンベルクとその周辺の両大戦間期における活動に着目したものである。ウィーン、ベルリンで一次資料調査を行い、シェーンベルクが書き込みをしたシューベルト作品の楽譜や、指揮者ヘルマン・シェルヘンがシューベルトの交響曲を論じた原稿などにあたった。これらの資料をもとに彼らのシューベルト解釈を明らかにし、思想家テオドール・アドルノのシューベルト論、戦後の音楽美学との関連を指摘した。

研究成果の概要(英文)：This project examines the activities of the composer Arnold Schoenberg and his circle in the interwar period as a turning point in the evaluation of Franz Schubert. In Vienna and Berlin, I examined some primary sources such as Schubert's music containing several notes written by Schoenberg and manuscripts about Schubert's symphonies written by the conductor Hermann Scherchen. Based on this research, I clarified their interpretation of Schubert and demonstrated their close relationship to Theodor Adorno's essay on Schubert and postwar musical aesthetics.

研究分野：音楽学

キーワード：フランツ・シューベルト テオドール・アドルノ アーノルト・シェーンベルク ヘルマン・シェルヘン
両大戦間期 作品受容

1. 研究開始当初の背景

今日、オーストリアの作曲家フランツ・シューベルト(1797-1828)の音楽に、時代を先取りするような独自の創作原理が指摘されるようになって久しい。しかし、「歌曲王」の称号やウィーンの居心地良さと結び付けて語られてきたシューベルト像がいつ、どのようにしてその転換を迎えたのかを問う研究はこれまでない。

クライスレ・フォン・ヘルボルンによるシューベルトの最初の伝記(1865)にも顕著なように、シューベルトは19世紀中から、大形式を苦手とする、歌曲やピアノ小品の作曲家というレッテルを貼られてきた。さらに20世紀初頭には、フェリックス・ザルツァーやハンス・ケルチュに代表される音楽学者たちが、ベートーヴェンの中期ソナタを理想とする立場から、シューベルトの形式批判を行った。

こうした否定的解釈に対する反論が音楽学論文として集中的に現れるのは、ようやくシューベルト没後150年(1978年)頃のことである。しかし、その萌芽はもっと以前にさかのぼることが可能と考えられる。

1920年代は、シューベルト没後100年(1928年)を目前にして彼への関心が高まった時期であるとともに、第一次世界大戦を経て、音楽美学的潮流が大きな転換を迎えた時期でもある。ピアニストで作曲家のアルトゥール・シュナーベルやエドゥアルト・エルトマンらがシューベルトのピアノ作品を高く評価し、今日につながる演奏普及の道を開いたのも、この時代である。その背景には、ウィーンの文化的伝統と一線を画すベルリンの進歩的な気風と、調性システム崩壊後の新たな音楽のあり方を探求した、前衛作曲家としての彼らの姿勢がある。

両大戦間期のシューベルト像刷新の試みをより大きな視野で捉えるためには、無調音楽から十二音音楽へと、20世紀前半の新たな音楽の方向性を決定づけたシェーンベルク・サークルに着目することが有効であると考えられる。

さらに彼らは、ダルムシュタット夏季現代音楽講習会に象徴される戦後のヨーロッパ音楽界に大きな影響力を持った。第二次世界大戦後の音楽の方向性を大きく決定づけたダルムシュタットにおける議論と、シェーンベルク・サークルにおけるシューベルト解釈との照応を明らかにすることは、戦後の音楽解釈に与えた彼らの影響を示すことになるとともに、1970年代以降の音楽学的成果を、戦前からの系譜に位置づける可能性を内包している。

2. 研究の目的

本研究は、両大戦間期のシェーンベルク・

サークルに焦点を当てることによって、シューベルトの評価における転換がどのように起こったかを明らかにしようとするものである。具体的には思想家テオドル・アドルノ、作曲家アーノルト・シェーンベルク、指揮者ヘルマン・シェルヘンを取り上げた。彼らがどのようにシューベルトを肯定的に評価したのか、彼らのシューベルト理解が戦後どのような波及を見せたのかを明らかにすることが本研究の目的である。具体的には、以下の二点が挙げられる。

(1) アドルノ、シェーンベルク、シェルヘンそれぞれのシューベルト理解を考察し、その相互の連関を明らかにする。

(2) 彼らのシューベルト解釈と、戦後の音楽美学との間にどのような照応が見出されるか、検討する。

3. 研究の方法

研究方法としては、関連する文献資料を活用するとともに、シェーンベルク、シェルヘンに関する一次資料の調査を行った。

(1) アドルノの音楽美学的著作、および先行研究を読み込み、彼の「フランツ・シューベルト」(1928)に見られるシューベルト論の考察を進めた。またダルムシュタット夏季現代音楽講習会に関する先行研究、ブーレーズやリゲティら主要な作曲家の論考にあたり、戦後の音楽美学的議論の理解に努めた。

(2) シェーンベルクが所蔵したシューベルト作品の楽譜にあたり、シェーンベルクが残した書き込みを調査するとともに、彼の数多くの論考を精読し、シューベルトの作品に対する彼の解釈を考察した。

(3) シェルヘンが刊行を目指していたシューベルトの交響曲に関する論考について、残された原稿と所蔵楽譜をもとに検討した。その際、シェルヘンの音楽観や教育的態度が、作品解釈に及ぼした影響を考察するため、ラジオ放送や音響実験に関するシェルヘンの取り組みを扱った先行研究や、シェルヘンが1930年代にストラスブル、パリをはじめ各地で開催した音楽講習会に関する資料を参照した。

4. 研究成果

シェーンベルク所蔵のシューベルト楽譜を用いた調査からは、シェーンベルクがシューベルトの音楽をどのようにみなし、何を評価していたのかを考察した。

シェーンベルクによる楽譜への書き込み

を見る限り、和声に関して、複雑な和音進行に対する分析はわずかで、単純な進行を通して、あるいは推移なしに遠隔な調が現れるようなところに和声記号が書き込まれていた。また不規則な拍節構造に対する書き込みも見られたが、そうした不規則性は音型反復の中で生み出されたものであった。興味深い点として挙げられるのは、モーツァルトやベートーヴェン、ブラームスらの作品に対して見られる、主題のモチーフ分析が全く見当たらなかったことである。このことはシューベルトと他の作曲家に対する、シェーンベルクの分析的観点の違いと捉えることができる。

シェーンベルクは、シューベルトの音楽に見られるモチーフの並列やリズムの反復に「ポピュラー性」を指摘する一方で、単純な反復の中に生み出される不規則性や遠隔調領域の並置に彼の独創性を認めていたことが明らかになった。またこのように「発展的変奏」とは異なる音楽原理を持つ音楽として評価しようとする彼の姿勢は、アドルノの「シューベルト」(1928)にもつながるものと言える。(学会発表として発表。)

シェルヘンによる1930年代の音楽講習会に関する資料からは、シェルヘンが若手指揮者の指導においても、同時代作品を積極的に取り上げようとしていたこと、他方で指揮法の講座において取り上げるべき重要な古典作品として、シェルヘンが挙げたリストの中にシューベルトの交響曲が含まれていることが分かった。また当時の新聞記事から、講習会の一環として行われた若手指揮者による演奏において、実際にシューベルトが取り上げられていることを突き止めた。

シェルヘンがシューベルトの交響曲を論じた原稿はこれまで精査されていない資料であり、この原稿の考察は本研究における最大の成果である。原稿は、シューベルトの交響曲口短調「未完成」、および八長調「大交響曲」第1楽章の分析を含み、全体で100頁近くに及ぶ。《未完成交響曲》に関しては、とりわけ多くの修正稿が残され、またシェルヘンの書き込みが見られる楽譜も参照することができた。

本原稿の考察から、彼がシューベルトの音楽に、瞬間にとどまり、空間的に広がるような性質を見出し、それを実現する多層的なシンメトリーと音空間の造形を重視していたことを明らかにした。

シェルヘンもまた、シューベルトの音楽を、推進力を持って先へと突き進んでいくベートーヴェンの音楽とは、対照的なものとして捉えていたことが分かる。このことは、彼のシューベルト解釈が今日にも有用な示唆を含んでいることを示している。またさらに、彼のシューベルト解釈には、リゲティのヴェーベルン論などにも通じる語彙の使用が見られること、すなわち戦後の音楽的観点とも呼応するものであることを指摘した。(雑誌論文として発表。)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

山口真季子「ヘルマン・シェルヘンによるシューベルト解釈 未刊行の原稿「シューベルト・ブック」を手がかりに」、『音楽学』、日本音楽学会、第63巻2号、2018年3月、pp.78-93

〔学会発表〕(計 1 件)

山口真季子「シェーンベルクによるシューベルト作品分析 シェーンベルクの所蔵楽譜における書き込みを手掛かりに」、『日本音楽学会第68回全国大会、京都府：京都教育大学、2017年10月28日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

〔なし〕

6. 研究組織

(1)研究代表者

山口 真季子 (YAMAGUCHI, Makiko)
大阪大学大学院文学研究科招へい研究員
研究者番号：40782214

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし